

---

# 実希story2

M 3 0

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

実希 story 2

### 【Nコード】

N56010

### 【作者名】

M30

### 【あらすじ】

ある日、実希はとある現場を見てしまって……。

ドタバタコメディ第2弾！

四人で織り成す、笑えるリレー小説！！

一話が短いので暇なときに気軽にどうぞ。

## 第一羽（前書き）

久しぶりの更新です！

まだまだ拙い文ですが、よろしく願いします！

また、実希 story を読んだ下さった皆様、ありがとうございます！  
ます！

感想、お気に入り登録もありがとうございました！

これからもよろしく願いします！！

b y M ・ Y

## 第一羽

あれから五年後・・・

実希は大学に行く年頃になった。

（もちろん中学校さえ中退してしまって、大学などいけるわけがなくいっていないのだが。）

実希は、眼鏡からコンタクトにして、髪はセミロングのカールを肩にたらしめている。

こげ茶に髪を染め、なかなか今風になっている。

ガチャッ！

突然、家のドアが乱暴に開く。

「あ、お兄ちゃん。お帰んなさい。」

実希は家に入ってきた男をみて、笑顔でそういうと

「ただいま〜！」

と、男も笑顔でそう返事した。

父と母を一度になくして、ふらふらと旅をしていた実希は、沖縄に住みつき

東京にいた兄を呼び寄せて一緒に暮らしていた。

「あ……。」

実希は兄と共に、帰宅したもう一人の女性をみて

思わず声を出す。

「サキさん、も、お帰りなさい……。」

水島 サキ。

実希の兄の彼女でルックスも良く、とても大人びているが、実は実希と同じ年なのだ。

が、実希はこの水島サキが苦手だったりする。

(ふう……。またきたのかあ。)

お互いに「こんばんわ。」と、挨拶して、サキさんは台所へと向かっていった。

水島サキは毎晩夕食を作ってくれているのだ。

サキさんが台所にむかってしばらく。

いいにおいがたちのぼってきた。

(これが、またおいしいんだよね。)

実希はサキが苦手ではあるが、サキの作るおいしい料理は大好きだ。

ちなみに、実希は家事が何一つとしてできない。

それと比べ、サキはありとあらゆる家事をこなす

サキさんに家事を教えてもらいたいな、と思うこともあるが

そのたびに同じ年と言うことが思い出され、実希のプライドが許さない。

「できたよー」

台所から、サキさんの声が聞こえてきた。

ちやぶ台に料理を手際よく並べると、「いただきます。」といって

兄とサキさんは料理を食べ始めた。

「実希ちゃんもどうぞっ。・・・今日は実希ちゃんの大好きなオムライスだよ。」

「あ、りがとう・・・ございます・・・。」

「いただきます。」

どうしても敬語を使ってしまっ。

本当はサキさんが苦手なわけではなく、うらやましいだけで・・・。

自分への苛立ちに、思わず顔をしかめた。

「あ、実希ちゃん！ おいしくなかった！？ ごめーん」

イライラ・・・

「大丈夫？ 実希ちゃん！」

イライラ・・・

「・・・。。。おいしいです！」

「よかったあー！」

実希がサキのうるささにイライラして、答えると

サキはにっこりと笑った。

皆が食べ終わると、サキさんがチャツチャと片付けて、兄と仲良く話し始めた。



## 第二羽

実希の願いもむなしく、サキさんは10時頃まで家にいたが、  
やっと帰った。

そこで、実希はようやく兄に話を切り出すことができた。

「お兄ちゃん……。うちさ……。」

兄は「なんだ？ 話してみろ」という顔で、やさしく頷いてくれた。

実希は、その柔らかな兄の表情を見て、少し安堵する。

小さく深呼吸をしてから、実希は口を開いた。

「あの、さ、お父さん……、殺しちゃった……。いろいろあ  
つて……。」

ブホッ!!

実希の話を聞いたとたんに、兄はむせてしまったが、落ち着きを取  
り戻して言った。

「知ってるよ。ニュースになってたろ？ まあ、事情は  
聞かないとだな。」

兄として。」

兄は、ようやく話してくれたか、とやさしい笑みを浮かべる。

そんな兄を見て、実希は恐る恐るも

思い切って、今まで起こったことすべてを話してみた。

兄は、実希の話を聞いている間、笑ったり、ふうんと言う感じで頷いたりして

最後まで、黙って話を聞いてくれた。

「　　そっか。　　大変だったな、実希。　　頑張ったな。」

その優しい言葉に、実希は息を吐き出した。

今まで、知らず知らずのうちに張り詰めて息を止めてしまっていたのだらう。

（いやー、死ぬかと思ったわー。　息苦しすぎて。）

とにかく、実希は今までのことを話せて、安心した。

ふと、時計を見てみると、短針と長針が共に12を指していた。

（あー！　もう寝る時間ー！）

「ありがとね、お兄ちゃん。」

そう言って、実希はいそいそと自分の布団にもぐりこみに行った。

次の日の朝を気持ちよく迎えた実希は、「うーん。」と大きく伸びをしたあとに、散歩に出かけることにした。

「今日はいいそらだなあ……。」

実希が散歩するコースは、毎回決まって、家のすぐそばにある緑豊かな公園だ。

歩いていると、心が落ち着く、緑がきれいな場所であり、実希のお気に入りの場所である。

実希が、小鳥達とおしゃべりしながら(?)しばらく歩いていると……。

大きな泉に辿り着いた。

(こんなところあったっけなあー?)

実希が、ぼへーっとながら歩いていると、小石につま先を引っ掛けて転んでしまった。

と、次の瞬間!

「太田実希、拘束!!」

という、凜とした声が響き、実希は数人のマッチョさんに腕をとら

れていた。

(あ、あれ？ おとぎ話っぽいムードはどこに消えた!?)

実希は疑問に思いつつも、凜とした声の持ち主。

つまりは命令を下した人物の顔を見た。

「ハイ、元気？」

(ももも、守屋ツナミ・・・ だあああ!!?)

無駄に高いテンションと、強気なその態度に思わず顔が引きつる。

(あれ、なんで、うち拘束されてんの!?)

今更気付く実希だった。

「なんで？」と顔に書いて、実希はツナミに答えを求める。

「今日はお願いがあって来たの。 お兄さんに迷惑をかけないで、  
お金をもつけたくなあーい？」

ウチの潜入捜査に、アナタが必要なの!!

ニワトリになれるその力、今、生かしてみない？

ま、断っても無理やりつれてくケ・ド」

第二羽（後書き）

作  
M・S

### 第三羽

実希はなんだかよく分からなかったが、お金が欲しくてたまらなかった。

ので、すんなりOKした。

「ふふふー）（） これでお金が溜まる。へそくりだーい

」

と、テンションMAXになってスキップしながら家に帰った。

家に着くと、もうサキさんは帰っていて、兄ちゃんが一人でお笑い番組を見ながら

ケラケラ笑っていた。

「あー、やれやれ。なんちゅー気楽なヤツだ。」

と、実希は思った。

その夜、実希はお金のことですごく頭がいっぱいだった。

「1日時給300円として、6時間はたらいて1800円！！

それを1ヶ月つづけて5万4千円！！！！！！！！！！

ウォーーーー！！　むっちゃ　かせげるやん！！」

そのお金で何をしようと考えただけで、実希の顔はどんどんにんまりしていくのであった。

翌日、また散歩していると守屋ツナミがあらわれた。

「おーきたかきたかー。」

と実希がいうと、守屋ツナミはそそくさと実希を車にのせて出発した。

実希は何がなんだか分からなかったが、昨日はお金のことを考えすぎて興奮して眠れなかったため、

おそろしいすいまにおそわれた。

2時間後、目を覚ますとなんとそこには見たこともない景色が広がっている訳もなく、

どこを見ても

木！！木！！木！！

という場所に来ていた。

## 第三羽（後書き）

作 O・M

M3O1同より

実希 story を読んでくださっている皆様。

毎度、ありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5601o/>

---

実希story2

2010年10月28日22時12分発行